

高校生とめぐり、
福祉施設を舞台とした、
「ただ、そこにいる」ことからはいまる、
わたしと福祉を考える旅



「滞在」から、わたしと福祉を考える

はじめに

I

01 企画の背景をたどる

・企画が生まれた背景	3
・企画がめざしたもの	4
・企画の概要	5

02 滞在ツアーの足跡をたどる

・滞在ツアーのスケジュール	8
・滞在ツアーの様子	9

03 それぞれの思いをたどる

・参加した高校生の思い	15
・ツアー関係者の思い	20

「滞在」から、わたしと福祉を考えるメモリー

自分らしさってなんだろう。障害ってなんだろう。福祉ってなんだろう。

2025年の冬、福祉施設への「滞在」を通じて、
高校生5人が、自分自身や福祉、
そして社会について思いや考えを巡らせる時間を過ごしました。

施設見学でも職場体験でもない、「ただ、そこにいる」という「滞在」。
そこでは何かをすることも、何かを求められることもありません。
そこに流れる空気を感じたり、気になることがあれば聞いてみたり、
すれちがう他者とコミュニケーションを交わしたり。

誰かのフィルター越しではなく、参加者が主体となり、
それぞれの"らしい"あり方で福祉施設での時間を過ごすことから始めています。

高校生が滞在する福祉施設は、
その人がその人らしくいられることを大切にしている場所。
膨大な情報が溢れ、匿名性が高まる現代社会のなかで
私たちが見失いがちになるけれど、大切にしなければならぬものが、
そこには存在しているのかもしれない。

限られた時間でしたが、参加した一人ひとりに変化が生まれました。
それは感覚だったり、意識だったり、はたまた価値観だったり。

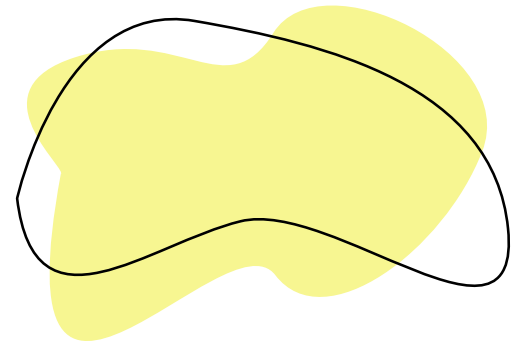
同時に、高校生の素朴な問いや、そのまっすぐな言葉から、
そこに居合わせた職員が、日々の在り方や関わり、そして仕事について、
改めて意識したり、考えたりする時間にもなりました。

本冊子では取組みの背景や当日の様子、参加者や関係者の思いを掲載しています。
この取組みをまずは福祉関係者の皆さんに知っていただき、
福祉施設が地域とともに取り組んでいく一つの選択肢となり、
また新たな場所で「わたしと福祉を考える旅」が始まることをめざしています。

そして、教育関係者の皆さんにも
学びあう場としての福祉施設が持つ力を知ってもらえたらと考えます。

企画の背景をたどる

高校生を対象とした企画が生まれた背景。
そして企画がめざしたものとは。



企画が生まれた背景

一秒でも速く、一つでも多く。

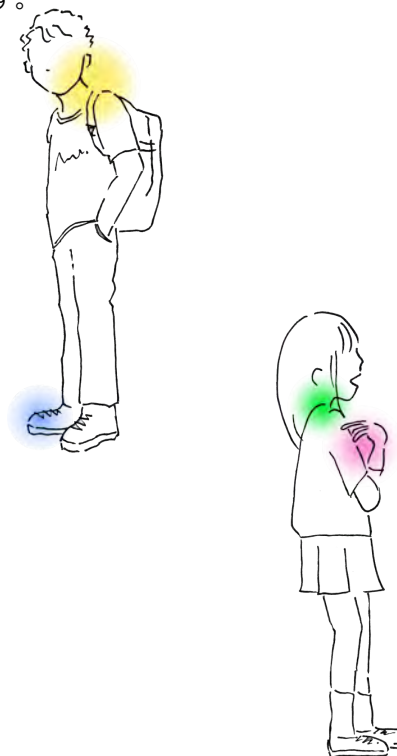
そんなふうに効率や成果を追い求めてきた結果、
どこにいても離れた世界の情報に触れることができる社会になったし、
スマホさえあれば、どこにでも行けるようになりました。

その一方で、小中高生の自殺者数の高止まりや犯罪の低年齢化など若者に孤立や生きづらさが広がっています。
また、社会の匿名化がすすみ、地域のつながりが希薄化するなか、個人や世帯の抱える問題は困難化、複雑化しています。

多様性、地域共生社会。そうした言葉は当たり前に使われるようになりました。
しかし、実際には多様な他者と交わり、**自分と異なる考えや価値観に触れる機会**は少なくなっています。
同質性の高い状態にあり続けることは、自分の見方や価値観が「あたりまえ」や「常識」となり、
揺らぐことも、自己を疑うことも難しくなるといえるのではないのでしょうか。
それは同時に自分の枠の外にいる他者に対して意識が向かなくなる、
あるいは否定や偏見を生み出していくことにつながるのではないのでしょうか。

出生率の低下、単独世帯の増加、地方の過疎化、頻発する災害。
私たちが向き合わなければならないさまざまな社会や地域の課題。
そんな現代だからこそ、個人の問題はその人の責任であるという考えではなく、
その問題の背後に在るもの、その問題を生み出す社会に対して、
みんなで取り組んでいくという意識醸成のきっかけを若年期から積み重ねていくことが大切になっていきます。

”東京らしい多様性を活かした地域共生社会”づくりを掲げる東京都社会福祉協議会として、
そのきっかけの一つを生み出すことができないだろうか。
家族や同級生との関係が日常の中心となる子どもたちに多様な生き方や価値観があることを知ってもらいたい。
とりわけ、今後の進路や人生を考えていく時期にある高校生を対象に、
自分の枠を超えて多様な他者と交わりながら、
福祉や社会について、考える時間を過ごしてもらおう機会はどうだろうか。
そうした考えから、今回の企画は始動していきました。



2025年
1月6日
・
7日
(2日間)

※定員に達した時点で募集は締め切

ただ、そこにいる
そこから始まる福祉の旅
わたしらしくって、なんだろう
自分がらしくいられた場所って、ど
んな場所だろう。それを手ある仕事
って、どんな仕事だろう。
そんなことって、ただ、そこにいる
ことから、考えてみませんか？
キレキレは「滞在」です。実際の福
祉施設に滞在して、ただ、いてみる
なで、流れている時間を感得して、みん
なでおしやべりしてみよう。
わたしと福祉を旅する時間を過
ぎてみませんか？
あなたが感じていたもの、そこで
見つかるかもしれない。

Being Thinking Tour2025
「滞在」から、
わたしと福祉を考える



<滞在先>
メイプルガーデン
(社会福祉法人愛成会)
・・・中野区にあるメイプルガーデンは、「障害者総合
支援法」に基づく障害者支援施設で、施設入所支援
事業、生活介護事業、短期入所事業を行っている。

主催：社会福祉法人東京都社会福祉協議会
〒162-3953 東京都新宿区神楽坂1-1 <http://www.tcsu-tvcc.or.jp/>
協力：社会福祉法人武蔵野会 ふくしプラザセンター設立準備室

〈問合せ先〉
東京都社会福祉協議会事務局企画担当（うつみ・いちまる）
電話：03-3268-7171

福祉施設を舞台とした企画がめざしたもの

企画段階からはへキレキ舎の小松理虔さん（P6）が加わり、
小松さんの経験をふまえたアドバイスを受けて、
高校生が福祉施設へ「滞在」することから、自分自身や、福祉、社会について考えてもらう企画に。

企画の舞台となる福祉施設は、その人がその人らしくいられることを大切にしてきた場所。
そこで、施設見学や職場体験といったように
「何かをやる」「何かを求められる」という状況を大人が用意するのではなく、
そうした日常の枠からも抜け出して、福祉施設に「ただ、いる」ことからはじめてみる。
「ただ、いるだけでいい」といわれて、はじめは戸惑う参加者もいるかもしれない。
そんな戸惑いも含めて、主体的な時間を過ごしてもらうことで、
生まれた気づきや学びは内在化され、
その場限りのもので終わらずに、その後の自己や日常にも跳ね返っていくと考えました。

「福祉施設」という場、「滞在」という参加のスタイルに加えて、
企画の大切な要素となるのが、他者との「対話」。
それぞれが感じたことや気づきを自分だけに留めずに言語化し、他者と共有をしていく。
異なる視点や見方が入ることで、新たな気づきや問いが生まれたり、揺らいだりすることを意図しました。

限られた時間のなかで、一人ひとりの思いや変化にしっかりと向き合うために
定員は少人数に設定し、地域との関係性や今後の接点を意識して参加対象も限定。
取り組みそのものが参加者にとって「福祉的」なものであることを意識してすすめていきました。

企画の概要

「滞在」から、わたしと福祉を考える～BeingThinkingTour2025

第1回目の行き先は、中野区にある社会福祉法人愛成会が運営する障害者支援施設に決定。

中野ブロードウェイ近くの住宅街にある入所施設「メイプルガーデン」は生活の場であり、地域から日中活動に通う利用者もいます。

また、通所事業所「ふらっとなかの」は生活介護事業・就労継続支援B型事業を運営する事業所であり、

就労継続支援B型事業は利用者へ働く機会を提供しています。

それぞれの施設があるまちやそこでの利用者の暮らしを感じてもらうために「まちあるき」もツアーの行程に組み込みました。

多様な関係者の協力を受け、企画始動から半年が経過した2025年1月6日、7日に実施に至りました。

ツアー概要

日程:2025年1月6日～7日 9時30分～16時

対象:中野区及びその周辺エリアに在住・在学する高校1・2年生 8名

滞在先:「メイプルガーデン」・「ふらっとなかの」

主催:東京都社会福祉協議会

メイプルガーデン

「障害者総合支援法」に基づく障害者支援施設であり、施設入所支援事業、生活介護事業、短期入所事業を行っている。施設名同様、フロアや施設内のお部屋には、植物にまつわる名前がつけられている。



ふらっとなかの

生活介護・就労継続支援B型を運営する通所施設。徒歩で通う方もいれば、電車やバスで来られる方も。地域に開かれたカフェではパンやドリンクのほか、手芸の製作品も販売されている。



「滞在」から、わたしと福祉を考える～BeingThinkingTour2025 関係者



企画アドバイザー/ツアーコンダクター

へきレキ舎代表 小松 理虔さん

福島県で暮らす地域活動家。
地元いわきで「へきレキ舎」を立ち上げ、
商店街でオルタナティブスペースUDOKを運営しながら、食や観
光、医療福祉、文化芸術など幅広い分野の企画、情報発信に携わ
る。近年は、福祉施設に滞在し、そこで感じたことを本にした
り、記事にしたりする活動が続いている。今回の企画の組み立て
から、当日は問いかけ役として高校生を引率。



ツアーの舞台となる福祉施設

社会福祉法人愛成会 友利さん 小川さん 太田さん

1958年に設立。都内で2番目にできた社会福祉法人。
「人はみんな、自分の人生の主人公」を理念に、
一人ひとりの意思を大切に、
個性を発揮できる環境を育て、社会と密に手をつないで、
障害のある人の暮らし、仕事、遊びの充実をめざしている。
入所・通所施設のほか、グループホームを運営。
今回はそのうちの、入所施設「メイプルガーデン」と
通所事業所「ふらとなかの」がツアーを受入れ。



映像制作

富田 了平さん

フォトグラファー／ビデオグラファー。
これまで、様々な形態のプロジェクトについて
写真・映像での記録のほか、映像作品の制作などを行う。
“違い”を超えた出会いで表現を生み出すアートプロジェクト
「TURN」にも携わった際には、
福祉施設に滞在するアーティストを映像で記録している。
今回は2日間にわたるツアーの映像制作を担う。



ツアーサポーター

一般社団法人ぼくみん 佐藤 由さん

世代や領域、分野の垣根を越えて、多様な人びとと協働し、
未来社会づくりに取り組む団体「ぼくみん」のメンバーとして、
「ふくしデザインゼミ」をはじめとした、学生に向けて、
福祉をひらく取組みを行っている。
今回は、ツアーサポーター役として引率。
ツアー前の関係性づくりや、
当日は高校生に近い立場から問いかけや声掛けを行う。



グラフィックレコーディング

齋藤 みささん

地域で開かれる研修やイベントに参加し、
その様子をグラフィックレコーディングで
記録するなどしている。民生児童委員としての顔も。
今回は対話や振り返りのじかんの記録に加え、
ツアーにも同行し、他の関係者とは異なる視点や見方を
参加者に示している。



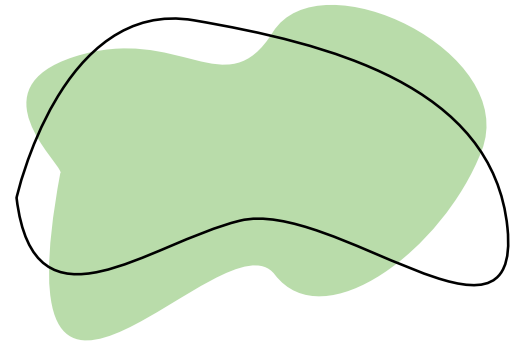
企画実施に至る協力

社会福祉法人武蔵野会デザインセンター設立準備室

専門や領域を超えて学生たちを対象とした学びのプログラム「ふくしデ
ザインゼミ」に取り組むなど、多様な企画から福祉を社会にひらくこと
をめざしている。
今回はそうした経験から、ツアーの実施前後の打合せ等の場において、
助言やアイデアを提供。

滞在ツアーの足跡をたどる

「滞在」ツアーはどんな様子だったのか。
「ただ、そこにいる」って？



滞在ツアーのスケジュール

Day 1

- 9:30 中野駅に集合
- 10:00~12:00 「メイプルガーデン」に滞在
- 12:00~13:00 お昼ご飯をいただく
(感染症対策から今回は参加者のみで)
- 13:00~14:00 「メイプルガーデン」に滞在
- 14:00~16:00 対話の時間
・滞在から感じたこと ・生まれた問い etc

Day 2

- 9:30 中野駅に集合
- 10:00~12:00 「ふらっとなかの」に滞在
施設の周りをまちあるき
- 12:00~13:00 お昼ご飯をいただく
- 13:00~14:00 「メイプルガーデン」に滞在
- 14:00~16:00 対話の時間
・1日目の問いに対する答え ・福祉との関わり etc

どんな気づきがあった？



いぶんらしさって？

他者と、自己との対話

1日目の「滞在」から生まれた問いを携えて2日目へ。
ツアーの最後には、
その問いに対してどんな答えがでたのか、もしくは出なかったのか。
それぞれが行き着いた先をそのまま共有する。

1日目、2日目の最後にはみんなで対話する時間。
「滞在」から感じたことや生まれた問いなどを、
それぞれが言葉にし、他者へ共有をしていく。

自分とは違う見方や価値観に触れることで、
自分の潜在的な意識や価値観に気づかされたり、
揺らぎのなかで、新たな気づきや変化が生まれたり。

福祉とこれからどう関わる？

障がいって？

「滞在」から生まれた、それぞれの問い

制限のなかの自由とは？

障害と個性の違いとは？

区別をすることから得られるものは？

対等な関わりはどんなもの？

自分らしく生きるとは？

どこからが福祉？

ルールや常識は何のため？



生きること と 働くこと

2日目はバスに乗って「ふらっとなかの」へ。

暮らしの場とは違う、
それぞれの"らしさ"や得意を大切にしながら、
「誰かの笑顔につながる」ことを感じてもらう瞬間を
いっしょに生み出していくところ。

そこにはバスで通う人もいれば、
歩いてくる人の姿も。

障がいのある人が働く
「ふらっとカフェ」には、
馴染みのお客さんが
パンを買いに来ていたり。

私たちが生きていく上で「働くこと」、
何か目的に向けて取り組むことの意味を
それぞれが考える時間となった。

福祉施設があるまちに、思いをめぐらせる

滞在する福祉施設から飛び出し、
施設があるまちを
歩いて考えてみる。

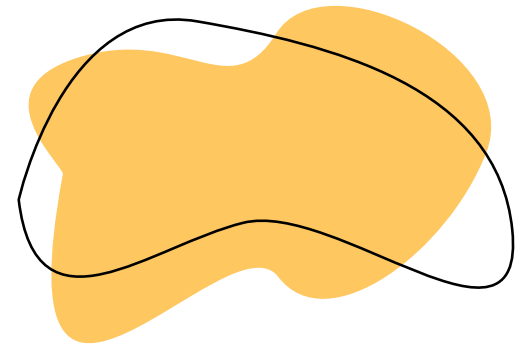
誰もが安心して暮らせるまちって？
どんなまちだったら暮らしやすい？
ここ素敵だなあと感じる場所は？

普段は通学したり、
何気なく遊びにきたりするまちを、
レンズ越しに捉え直してみる。



それぞれの思いをたどる

高校生は参加した後、何を感じたのか。
受入れ施設やツアー関係者は学生たちの思いをどう受け止めたのか。
それぞれの思いが交差する。



参加した高校生の思い

この二日間は私の価値観やもともと持っていた考え方を大きく揺さぶられるような、本当に貴重な二日間だったなと感じます。

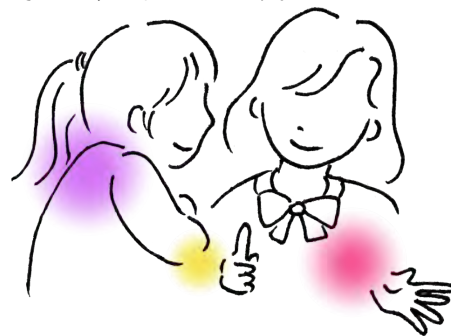
このようなことを言うと不謹慎かもしれませんが、「ふらっとなかの」で障害を持っている方の働く姿をみて、障害があってもここまで働けるようになるのか、と率直に思いました。中高一貫校に通い、障害のある方との交流はなく、自分と似た考えの人に囲まれて暮らす中で、様々な人を知る機会もなく、きっと、「障害者はパンをつくるなんてできない」「手芸なんて細かい作業はできないだろう」というように考え方が固まりかけていたのかもしれない。

しかし、今回ツアーに参加して障害がある方が生き生きと自分が得意なことを生かして働いている姿を目にし、今まで自分が持っていた考え方がいかにおかしかったのかと気がつくことができました。

ツアー最終日に「障害は個性と捉えるべき」という考えに行き着きましたが、時間をおいて頭の中を整理してみて、その捉え方は健常者が「自分は障害者に対して偏見を持っていない」と思い込むためのきれいごとなのではないかと思い始めました。今回、「個性」とは言い換えられないような重い障害を持っている方に出会いました。「障害は個性」という考え方は、障害を自分から遠ざける、自分とは無関係な個人の問題だと思い込む、そんな考えに導いてしまうきっかけになっているのではないかと感じました。

学生なのでどうしてもコミュニティが学校内に収まりがちではありますが、これからは積極的に外部のイベントに参加して、コミュニティを広げ、柔軟な考え方をもち、理解できるようになりたいです。

参加を機に一つのことに多くの疑問を抱き、その疑問を解決するためにじっくり考えることを億劫に思わなくなりました。身近なことから疑問を持ち続けることが、自分自身を見つめ直したり、新たな気づきを得るきっかけになるんだろうなと感じます。



自分の思考を再構築する、そんな機会になったと思います。

ツアーに参加する前は、自分は人と関わるのは苦手だし下手で、自分の意見なんて言えないだろうなと考えて不安のまま参加したのですが、まんべんなく意見を聞いてくれて、施設の方たちも意図はしていないと思うけれど、気軽に接してくれたので、自分の中で対人関係に自信が生まれました。

日頃、兄弟の将来について考えることが多かったので、

今回自分より年上の人と関わって新しい世界が広がったし、少し自分の肩の荷が降りた気がしました。

2日間を通じて、思考の部分では、

自分の中での障がい者のイメージがガラッと変わったというより、自分の中での想像の幅が広がった感じがします。

もともと特性や、それぞれの個性というのは何となく理解しているつもりだったのですが、

参加して、その特性や個性も一括りではなく一人ひとり細かく異なることや、

利用者の方の生活面に対して細かい配慮を行っている職員の方のことも考えられる、みられるようになったと思います。

障害のある方は私たちが思っている世界よりもっと、先を見据えていて、学ぶことがたくさんありました。

福祉の仕事も、障がい者や高齢者といった社会的弱者とよばれている方々に対してだけあるものだと思っていたけれど、実はとても私たちの生活に馴染みのある仕事でした。

「ただ、そこにいてみる」って、自分から何かを積極的にしなくてもいいけれど、

景色が私たちに感動を与えるように、自然と自分が相手に影響を与えているようなことかなと感じました。

今回、自分たちが「なにかしなきゃ、されなきゃ」という関係がなかったのに

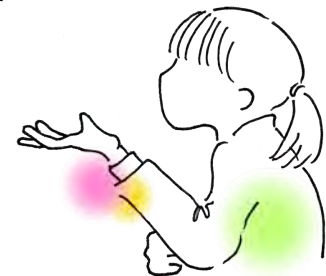
そこにいるそれぞれがお互いに刺激しあって、“対等な関係”に近づけた気がしました。

何より「いるだけでいい」という最低ラインが設定されているのに、

自然と交流が生まれていることによって、自分も人とのつながりで、不安を抱えなくて済んだし、居心地が良くて・・・

真の人とのつながりはただいることでいいのかなと思いました。

もっと色々な人と関わる機会を増やして、自分の世界を広げていきたいです。





生活を送っていく中でここまで生まれた疑問を深掘りすることもないし、同世代の人たちと意見を交換する機会もないので、楽しい時間を過ごすことができました。
今までかかったことがない、未経験のことに挑戦することはすごく勇気のいることだし、
今までのわたしであれば怖がってしまっていたと思うけれど“やりたい”“行きたい”という思いだけで参加してよかったと思えました。

ツアーに参加して、“正解をつくらないこと”、“その人のできることをみつけること”が印象的でした。
私たちの日常生活において、どんなかたちであれ求められていることには正解・不正解が存在しています。
この2日間の話をするのであれば”習字“や”コミュニケーション“があてはまり、
「お手本通りにかかなければならない」「何か質問されたら答えなければならぬ」、
そうしたルールや常識、暗黙の了解が存在しています。

けれど、今回滞在させていただいた2つの施設では、
そこにとらわれずに、否定することなく、前向きな対応が多くみられました。
「自閉症の人は急な予定変更には耐えられない」だったり、
「障がい者の方は何をやるかわからない」といった言葉をよく耳にしていたけれど、
きっとそうさせているのは周りの環境や私たちの対応の仕方に原因があるのではないのでしょうか。

私たちは成長していく中で気がつかないうちに概念や考え方が固まっていき、
「何を考えているかわからない」「他の人（私たち）とはちがう」という理由で
一方的に障害のある方に壁をつくってしまっているのかもしれない。

職員の方の行動を通して、“人を思いやること”や”対等に接する”など、人との関わり方を学ぶことができました。
「ありがとう」や「いいね」といった肯定的な言葉をよく耳にしているからこそ、
訪問者である私たちにも利用者の方がそういった声掛けをしてくれて、あたたかく迎え入れてくれたのだらうと考えました。
福祉の仕事って、他者との関わりを通して、自己を成長させられる場所なんじゃないかなと思います。
他者と深く関わるからこそ、思い通りにいかなかったり、ぐるぐる悩んだりすることもある。
そうしたことを積み重ねていながら、“一緒”に成長していくことができるのだらうなと強く感じました。

私は昔から人と関わるのが苦手で避けてきた節があるので、
今回学んだことや新たに知ることができたことを糧にしながら、少しずつ自分のコミュニティを広げていこうと思いました。

さまざまな課外活動や、学校内の学級を超えた活動に参加してきましたが、本当に稀な、素晴らしい企画やメンバーに恵まれたツアーだと思いました。

自分は勝手に姉妹でいることで、「障害」について理解していたり、対等に接することができていると思い込んでいましたが、それすら疑わしいと思っていたことを、今回参加することで強く実感させられました。どんな関わりが「対等」であって、そして「理解」をしているのだろうかと思いめぐらせることができた2日間でした。

滞在したなかでも、「書き初め」の時間はとても印象的で、職員さんと利用者さんとの間のコミュニケーションをみるなかで、「失敗が存在しない関係性」を感じられたり、相互に感謝していたりと、これまでの日常で感じたことのない関係性がみえた時間でした。「お手本」が存在していてもしていなくても、自分の中で考えたことを表現する利用者の方の姿を目にし、自分たちにとっての「当たり前」な書道と対比させ、置かれている環境の違いを強く感じ、色々と考え、気づきの多い場面でした。同時に、そうした利用者の方が自分の思いや考えを表現できる環境は、職員の方が関係性を築く中で生み出しているものであり、福祉の仕事は日々のケアだけでなく、そうした雰囲気的基础を社会につくっていく役割を果たしているのではないのでしょうか。



2日間を通して、滞在をしてみるだけでなく、他者と対話するという経験を得られたのは、自分の将来について考える大きなヒントになったと思います。1日の終わりに、メンバーと話すという機会もあって、自分にはない視点で物事をみるきっかけとなったり、その言葉を通して1日目と2日目で自分の視点の移り変わりを感じることができて、同世代の人と、同じ立場で、その中で多角的に物事を捉える楽しさや難しさを学ぶことができました。

将来の夢がある

ツアー2日目に、将来の夢について利用者の方が私に話してくれた。
初対面であり、かなり年下の私に対して、しっかりと話してくれたことに感動した。

夢を持つこと、それを語れる環境にすることが伝わる出来事だった。

私自身もそうだが、“夢がない”と話す友人も周りに多くいる。
自分の能力や、向き不向き等、たくさんのことを考えすぎて、
純粋にやりたいという気持ちを忘れてしまっているのではないだろうか、
やりたくても行動に移せないのではないだろうかとその人を介して強く感じた。



高校生が印象に残った、 誰かの「ことば」

ありがとう

施設の利用者さんやスタッフの方から
「ありがとう」という言葉を頻繁に耳にした。
私も心がけているけれど、
手伝わせてくれて「ありがとう」という感謝の気持ちは
思ったことも伝えたこともなかった。
「ありがとう」という気持ちがお互いに向いていたら、
とても良い世の中に、みんなが気持ちよく過ごせる世の中になるのではないのだろうか。

福祉の仕事は人の考え方や特性に寄り添い、
その人が幸せに生きることができる環境を生み出したり、
手伝ったりする仕事だなあと感じた。

新しい気づきができるのが羨ましい

他の参加者の気づきを聞き、
「自分の中では当たり前になっていた」と言いながら、
障害をもった家族のいる参加者からこぼれた言葉。

他の参加者の“滞在”を通じた気づきを受けて、
まっすぐに“羨ましい”と表すその一言に私自身もまた心を動かされた。

「当たり前」や「空気を読む」ことに関係した同世代からの言葉は
痛く胸に刺さるものであった。
障害があるからといって「できない」と決めつけることには
「当たり前」が隠れていたり、
「空気を読む」ということは、自ら壁をつくってしまっていたりなど、
普段生活している延長線上では到底気づくことのない、
かけがえない言葉をもらえたように感じる。



ツアー関係者の思い

「滞在」企画について話を聞いた時、はじめは「どうなるんだろう...？」という気持ちもあったけれど、世代が違う人が来て、「ただそこにいる」という取組みは初めてだったので、なんだかおもしろそう、違う発見ができるかもしれないとの思いで受け入れを決めました。

実際に受け入れてみて、すごく刺激になる機会で、高校生は緊張していたかもしれないけれど、とても自然体で、その時感じたことやさまざまな角度で見ていたところを、いろいろな言葉で表現してくれました。そうしたことを通じて、私自身が改めて仕事について考える機会にもなりました。学生さんと話して味わった感覚を、もっと多くの職員にも体感してもらいたかったな...って。

福祉で付き合う人はだいたい決まってくるもので、同調というか、自分たちに近い年代や、同じような意見や感覚である人にどうしてもなってしまう。そうした時にどんな視点を持っているかわからない、違う世代の人がひょっこり入ってくることは、すごく刺激になるし、頭が柔らかくなるし、自分たちがやっている仕事の意味を改めて考えることにもなる。職員も自分たちが無意識で声掛けしていることを客観的にほめられたりすると、自然とやっていることが、いいことなんだと気づく機会にもなります。いろいろな人が施設に入ってくることを、前向きに捉えられる取組みだと感じます。

採用とか、福祉人材がテーマだと福祉系の資格を持った人や学んできた人、関心がある人が対象になるけれど、今回の取組みは、そうではない。あまり福祉に興味を持っていない人にも福祉を言葉にして伝えられるきっかけが見つけれられるんじゃないかなあとと思います。

メイプルガーデン 施設長
友利 和江

施設としてこれまで中学生や大学生、専門学生とは接点があったけれど、その間の高校生はまさに未知な領域。久しぶりに触れる緊張感がありました。「こうなるのかな…」とかいう想像もないところで、うまく対応できるのか不安はちょっとだけありました。実際に受け入れてみると、来られた学生さんみなさん、本当にいろいろな視点から、いろいろなことを考えてくれて。何気ない日常をそれぞれの角度から分析してくれて、想像を働かせながら利用者さんと過ごしていただいたのが、本当に自然に繰り広げられていて感動しました。

そこで初めて会った関係性とは思えないくらい、学生のみなさんが自然に利用者の横にいたり、必要があれば話したり、聞いてみたり、緊張をすごいしているわけでもなく、だからといってラフすぎるわけでもなく。利用者さんも構えることなく、いい時間をつくってもらったという気持ちです。

私自身、「滞在」ということで、いろいろ考えずにいつも通りということで気楽に捉えている部分もありました。他の職員には、東社協の事業で高校生が来ることを伝え、何かをするわけでもないの、とにかく来ますよ〜というぐらいで（笑）。

職員はとにかく「来る」というイメージが強かったのか、普段と変わらない様子でした。受け入れてみて、学生のみなさんが自然な様子で活動空間にいてくれたのがよかった...という声が他の職員からも聞かれました。

利用者さんはいつもそうですが、外からのお客さんに対して本当にウェルカムな感じで、来た人の手をひっぱってその場に引き入れてくれるみたいに、人との関わりが好きなのか、とにかく慣れていて、改めてそうした一面を今回の「滞在」でみることができたのもよかったなと思います。

施設見学とかだけだと、見られているだけで終わってしまうのですが、そうではなくて今回のように一緒に過ごすという機会がこんなに自然にできることはなかなかないので、すごく貴重な機会をいただいたなあと感じます。

施設として外の人とふれあう絶好の機会であり、そこからちょっとずつ広がっていくと、いろいろな人との出会いを楽しめると思います。そして、利用者さんのコミュニケーション力を目の当たりにして感動できる機会にできる。いろいろな人と利用者さんを含めて出会う、貴重な機会だと感じました。

メイプルガーデン 主任

小川由香里

参加者の皆さんに会う前は、
「社会福祉士や保育士実習とは違うから、事業所がどのようなところなのか見学していただければいいかな」と、
そう思っていました。

ところが当日、参加者の皆さんから多くの質問を受け、
「福祉」という枠を飛び出し、
「生きること」「人として大切なこと」「社会人としての心得」などといった、
深く大きなテーマについて考えさせられる時間となりました。

「仕事（人と関わること）で一番大切にしていることは何ですか？」この質問が私はとても衝撃的でした。
なぜなら、対人援助職を20年以上も続けていると、
「これが私の信念」とか「このポリシーは譲れない」というように、
わざわざ「一番大切なこと」を意識したり言葉にしたりしなくなるからです。

改めて質問を受けると言葉に詰まる...。
一方で、大切にしていることがたくさんあり過ぎるような気もして「一番」が何なのか分からない...。

「そうか。このツアーは、感じる、考える、言葉にする、共有する、共感する、疑問を持つ、発見がある、その連続の塊だ！」と、
勝手に合点がいったように思います。

参加者の皆さんをお見送りしてから早いもので3ヶ月が経ちますが、
もっと共同作業をして語り合い、考える時間があったら、
想像もしなかったようなアイデアが生まれて現場の支援や環境改善にも活かされたかもしれないな...と、思っています。

この企画がこれからも続き、深化し、参加者が増えることに期待したいです。

ふらっとなかの 管理者
太田 光

“（福祉とは、）自己を他者との関わりをとおり、成長させられる場所”
“（「ただ、いる」とは、）自分から何かを積極的にしなくてもいいけれど、
景色が私たちに感動を与えるように、自然と自分たちが相手に影響を与えているようなこと”

参加者のアンケートを読みながら、たった2日間で多くの気づきや変化につながっていたことにとても驚きました。

福祉は、自己覚知と相互変容の連続。

人との関わり合いを通して、自分自身の考えや行動、感情に気づき、お互いに変化していく。

このツアーはまさにその連続で、“あたりまえ”だと思っていたことや、

”こうあらねばならない”と思っていたことが、

実はそうではないのかもしれない、と揺さぶられ、疑問を持ち、正解がわからない問いに向き合いました。

見学でも職場体験でもない、福祉施設に“滞在する”とは、役割や立場、その強さや弱さから離れて丸腰で放り込まれること。

これは、自分と社会の関係性を捉えなおし、

いかに自分が力を持っているのか、あるいはいかに抑圧されているのか、ということに気づくプロセスでもあったように思います。

障害を個性とまとめてしまっているのだろうか。

私のなかに差別はなかっただろうか。

私はどうしてあの利用者さんのように夢を語れなくなったんだろう。

“当たり前”に従って生きている私は実は誰かを排除することに加担していないだろうか。

同質性の高い教室を飛び出し、こうして向き合う経験が、

さまざまな抑圧から自分自身や身の周りの人々を解き放ち、

ともにいきいきと生きられる地域社会づくりにつながると考えています。

そしてこれは、滞在を受け入れる福祉施設側にとっても同様に大事な機会なのではないでしょうか。

いい支援とはなにか？福祉ってなんだ？と問う機会が、関わる人たちの生活をもっといい方向に解き放ってくれることもあります。

福祉施設をひらき、内側と外側が入り混じり、揺らぎの生まれる機会を、これからもつくり続けていければと思います。

一般社団法人ぼくみん

佐藤 由

福祉のスタートラインに立つツアー

ただ、いる。それだけのことなのに案外難しい。
参加した生徒は、きっとそう思ったことでしょう。
ぼくたちは、学校にいても、会社にも、家にいるときですら、意志を持ってなにかに向き合い、成果を上げなければならない。
「ただ、いる」だけじゃ価値を認めてもらえないわけです。

だから、「ただそこにいてください」と言われても、
ん？ なにをやったらいいの？ どういるのが正解なの？ ただいるってどういうこと？ と
次々に疑問が生まれてしまうのかもしれない。

障がいのある人たちにとっても、「ただ、いる」ことは難しいミッションです。
こだわりがあったり、みんなと同じことができなかったり、人とはちがうコミュニケーションをする人だったり、
それがちょっと個性的すぎたりして、学校や会社に、地域社会にすら居場所がなくなって施設にたどり着く。
そんな人は少なくないはずです。

福祉施設とは、だれかの「ただ、いる」ことを支える場所。そう言い換えられるかもしれません。

でも、その福祉施設に、謎の高校生が何人もやってきて「滞在させてください」と言ってきたらどうでしょう。
見学や視察なのか。案内する必要はないのか。
そもそも生徒たちが来たら利用者さんが興奮してしまう。
いつもとちがうイレギュラーな対応は難しい……と考える人も少なくないでしょう。
「ただ、いる」だけなのに、やっぱりなんだか難しいんです。

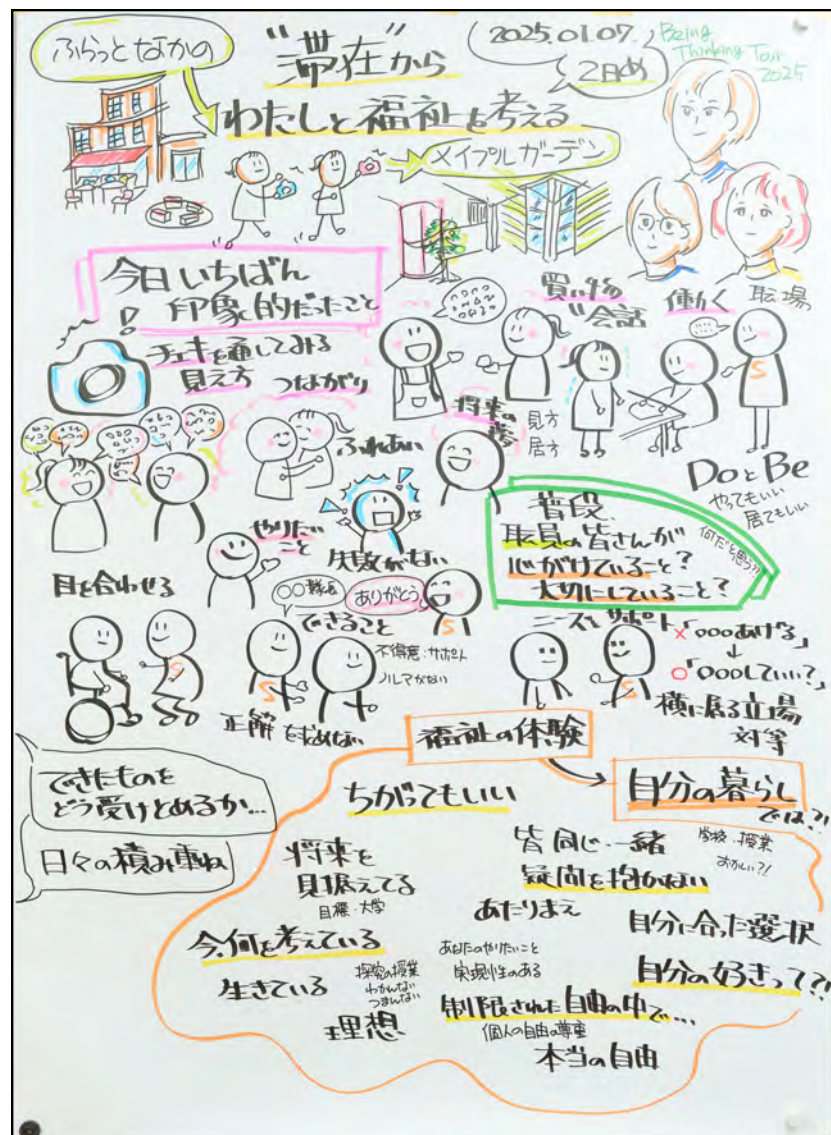
でも、それこそが「滞在プログラム」のミソです。

だれかの「ただ、いる」ことを支える場所で、
それを仕事としている人の姿や、自分らしくいられている人の姿を感じながら、「ただ、いる」ことを実践し、その意味を問う。
ゴールは設定されていません。設定されているのは「ただ、いる」というスタートラインです。
だからこそその時間は、福祉を知る時間にも、人間とはなにか、障がいとはなにかを問う時間にも、
新たな友情を育む時間にもなり得る。なにが起きるかわからない。答えがない。
けれど、次々に生まれる問いが、昨日よりも今日を豊かにしてくれる。
滞在プログラムで起きていることは福祉そのものののだと、ぼくは思います。

ヘキレキ舎
小松 理虔

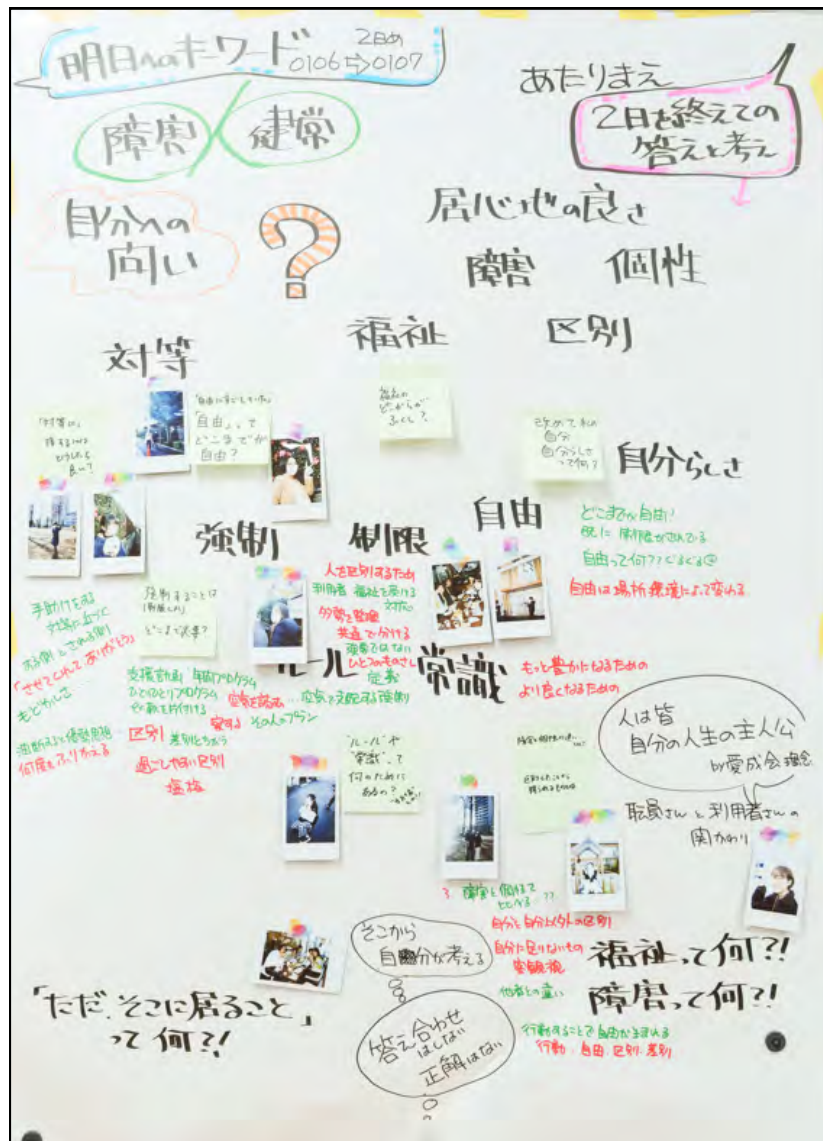
「滞在」から、わたしと福祉を考える旅

メモリー



「滞在」から、わたしと福祉を考える旅

メモリー





「滞在」から、わたしと福祉を考える旅
×モリー



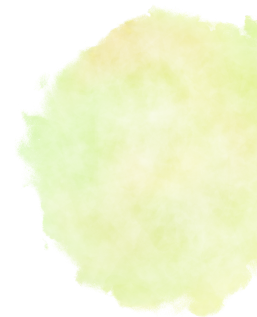


「滞在」から、わたしと福祉を考える
～BeingThinkingTour2025～ 報告書

社会福祉法人 東京都社会福祉協議会 総務部企画担当
2025年3月発行

特設ページ





本冊子は、東京都共同募金会の配分金により作成しています